

# 保育者を目指す学生の育ちを願って

－ 実習における課題とねらいの指導 －

鈴木 方子  
大岩 みちの

岡崎女子短期大学研究紀要46号 抜粋

平成25年 3月25日

# 保育者を目指す学生の育ちを願って — 実習における課題とねらいの指導 —

鈴木方子\* 大岩みちの\*

## 要 旨

本論文の目的は、学生の実習における課題とねらいの指導について、どのような指導が学生の学びを育てることになるのかを明らかにすることである。

そのために、実習前に学生が自分の実習の課題を記入し、実習後に課題を意識してねらいを立てることができたかについての意識調査を行った。その結果、学生が実習中も課題を意識し続けることができるような環境設定の必要性と、実習園の保育者の援助が重要であることが示唆された。保育者を目指す学生の育ちに関わる者として、今後もよりよい指導の方向性を探っていきたい。

## Abstract

This study aims to reveal what kinds of instructions can facilitate learning of college students in the guidance class for student teaching in childcare centers. The guidance class is to instruct students to find their points to be improved and their goals in their student teaching. To evaluate the instruction, students were asked to participate in surveys before and after the student teaching. Results show two things are critical. First, it is necessary to have a systematic structure in their educational environment for student teachers to be able to keep their goals in their mind during student teaching. Second it is indicated that the support from the supervising teacher at their placement plays significant roles.

**Key Words :** 保育実習 実習における課題 保育のねらい 事前事後指導

## I. 研究目的

本論文の目的は、学生の実習における課題と毎日のねらいの指導について、どのような指導が学生の学びを育てることになるのかを明らかにすることである。

実習は、大学で学んだ理論を基盤にし、保育の現場での実践を通して具体的に学ぶ場である。そして実習で学んだことを大学での学びに活かし、さらに新たな課題を見つけて実習に取り組むというサイクルがあり、それは時間の経過とともに深化していくものと考えられる。その実習への取り組みを支えるものが実習の事前事後指導である。事前事後指導の内容は多岐にわたるが、指定保育士養成施設における教科目の教授内容<sup>1)</sup>の中での保育実習指導Ⅰ、Ⅱの目標を示す。(下線筆者による)

### 保育実習指導Ⅰ 目標

保育実習の意義・目的を理解する。

実習の内容を理解し、自らの課題を明確にする。

実習施設における子どもの人権と最善の利益の考慮、プライバシーの保護と守秘義務等について理解する。

実習の計画、実践、観察、記録、評価の方法や内容について具体的に理解する。

実習の事後指導を通して、実習の総括と自己評価を行い、新たな課題や学習目標を明確にする。

### 保育実習指導Ⅱ 目標

保育所の役割や機能について具体的な実践を通して理解を深める。

子どもの観察や関わりの視点を明確にすることを通して保育の理解を深める。

既習の教科や保育実習Ⅰの経験を踏まえ、子どもの保育及び保護者支援について総合的に学ぶ。

保育の計画、実践、観察、記録及び自己評価について実際に取り組み、理解を深める。

\* 岡崎女子短期大学幼児教育学科

保育士の業務内容や職業倫理について具体的な実践に結びつけて理解する。

### 保育士としての自己の課題を明確化する。

下線を付した部分は、実習の事前事後指導の中で、今回の研究に際し、我々が取り組んだ部分である。学生が実習における自らの課題を明確にし、それに基づいて実際に取り組み、理解を深め、新たな課題や学習目標を明確化するという一連の流れを読み取ることができる。実習の事前指導で、学生が自らの課題を設定し、実習に臨み、事後指導で保育士としての課題を明確化するという過程の中で、学生の実習における課題がより重要であることは言うまでもない。

これまで我々は、実習生の課題とねらいとの関連を中心にして、よりよい実習の事前事後指導のあり方について継続して報告<sup>2)</sup>を行ってきた。前回の報告では、実習終了後にそれぞれの学生が、実習の課題と毎日のねらいを抜き出して記述することにより、課題とねらいを関連付けて実習に取り組むことができたかどうかについて調査した。その結果、課題とねらいを関連させることができた学生は、記録を振り返ることにより、課題を明らかにし、また保育者と連携しながら取り組んでいる傾向が見られた。すなわち、課題を明らかにして実習中も課題を意識しながら実習に取り組むことは、課題をふまえながら実習のねらいを立てることができることにつながり、それは循環性をもつプロセスであると考えられる。一方関連させることができなかった学生は、実習をこなすことに精一杯で、課題を意識することができなかつたり、ねらいを立案する根拠が不明瞭であったり、またねらいを振り返る視点をもっていなかつたりすることが明らかになった。ねらい立案の根拠の不明瞭さについては、「立て方がわからない」「具体的でない」「同じねらいになっている」「統一性がない」「実行できるねらいになっていた」「保育者に確認していない」等の意見があった。また実習の課題については、「実習に精一杯で意識していない」「漠然としていた」「具体的でなかった」「細かく立てていなかった」「子どもを見ないと立てられない」等の意見があった。しかしこれらは実習終了後に振り返って理解できたことであり、我々教員としては、事前指導の段階で、課題とねらいの関連について指導し、実習中も継続して意識することができるような指導のあり方を検討することが課題となった。

ここで改めて課題とねらいについてまとめておくことにする。課題とは、学生が実習で学ぶべきことである。その内容は、それぞれの実習の実施要綱で定められていることに付け加えて、実習の種類、段階、また学生の今までの体験等によっても異なっている。それを事前指導の中で、はっきりと意識化することにより、実習中は課題達成に向けて意欲的に取り組むことができる。課題の指導については、学生それぞれが、それまでの実習経験を基に次に行われる実習における課題を立て、担当教員はその課題を念入りに添削して実習に送り出している。また課題は、実習生個票の裏面に清書し、事前訪問時に実習園に提出するので、実習生の課題は、実習担当の先生に理解して頂いているのが前提である。しかしながら、実習が始まると、課題を意識して実習に取り組むことができる学生と、実習をこなすことに精一杯で、課題を意識することができない学生がいることも事実である。また実習中は、実習担当教員が実習生一人一人の課題に対して丁寧に対応する機会はほとんど無い。

一方ねらいとは、実習生の毎日の実習のねらいである。これについては、自ら立てた課題をふまえ、日々の保育を振り返りながら次の日のねらいを立案するように指導している。しかし日々の実習に追われ、実習を振り返らずに、一日の実習の始まりにねらいを意識することができなかつたり、ねらいの立て方がわからないという学生もいた。

以上のことから、今回は事前に実習の課題を記入し、実習終了後に同じ用紙に、課題を意識してねらいを立てることができたかどうかについての調査を行い、その分析を通して、課題とねらいの関連について、またその指導についての検討を試みた。

## Ⅱ. 対象・方法

### 1. 対象

A 短期大学幼児教育学科 第一部2年生205名  
第三部3年生52名 計257名

### 2. 方法

平成24年5月25日から6月16日までの保育実習Ⅰ・Ⅱの事前事後指導の授業時に調査用紙(1)に記入した。

実習前に、保育所保育実習の私の課題を記入し、実習後に全体を振り返っての感想と、課題を意識してねらいを立てることができたかどうかについて、1から6までの段階で自己評価を行い、その理由を選択するようにした。

### Ⅲ. 結果・考察

#### 1. 結果

表 (1) 課題を意識した段階

| 段階 | 項目          | 人数   | %    |
|----|-------------|------|------|
| 1  | まったく意識しなかった | 0    | 0    |
| 2  | 意識しなかった     | 0    | 0    |
| 3  | あまり意識しなかった  | 34   | 13   |
| 4  | 意識した        | 114  | 44   |
| 5  | やや意識した      | 87   | 34   |
| 6  | とても意識した     | 22   | 9    |
|    | 計           | 257名 | 100% |

段階1. 2. 3は課題を意識しないでねらいを立てたグループ、段階4. 5. 6は課題を意識してねらいを立てたグループとおおまかに二分し、それぞれにその理由をまとめた。表(1)から明らかなように、段階1のまったく意識しなかった、段階2の意識しなかった実習生はいなかった。これは、前回からの継続した調査により、学生が課題とねらいの関連について意識する機会が増えていることが大きな要因であると考えられる。

#### 2. 課題を意識してねらいを立てることをあまり意識しなかった例(段階3)

段階3のあまり意識しなかった実習生は34名であり、全体の13%にあたる。あまり意識しなかった理由を数が多かった順に表(2)にまとめた。なお番号は調査用紙(1)の理由の番号である。

調査用紙(1)  
実習における課題と毎日の保育のねらい

クラス番号 \_\_\_\_\_ 名前 \_\_\_\_\_

この用紙は、あなたの保育所実習における課題と毎日の保育のねらいとの関連について確認するためのものです。実習に行く前に課題を記入し、実習終了後に振り返ってあてはまる番号を○で囲み、振り返りを記入してください。

|      |                        |
|------|------------------------|
| 実習期間 | 平成 年 月 日 ( ) ~ 月 日 ( ) |
| 実習園  | (市・町) 公立・私立 (園)        |

実習前に記入 保育所保育実習の私の課題

|   |  |
|---|--|
| 1 |  |
| 2 |  |
| 3 |  |

実習を終えてから記入

\*全体を振り返って

\*課題を意識してねらいを立てることができたか

|             |         |            |      |        |         |
|-------------|---------|------------|------|--------|---------|
| まったく意識しなかった | 意識しなかった | あまり意識しなかった | 意識した | やや意識した | とても意識した |
| 1           | 2       | 3          | 4    | 5      | 6       |

\*1. 2. 3に○をつけた人へ  
課題を意識しなかった理由を以下の項目から選んであてはまる番号すべてに○をつけてください。

- ① 課題もねらいも頭から離れていた。
- ② 課題とねらいを別に意識していた。
- ③ 課題とねらいが同じだった。
- ④ 課題とねらいがずれていた。
- ⑤ 課題は意識していたが、ねらいは意識していなかった。
- ⑥ ねらいは意識していたが課題は意識していなかった。
- ⑦ 主活動に対するねらいを立てていたので課題に対するねらいではなかった。
- ⑧ 園の指導計画に合わせてねらいを立てたので課題と関連したねらいではなかった。
- ⑨ ねらいの立て方がわからなかった。
- ⑩ その他

\*4. 5. 6に○をつけた人へ  
課題を意識した理由を以下の項目から選んであてはまる番号すべてに○をつけてください。

- ① ねらいを毎日立てることによって、課題を意識することができた。
- ② ねらいの中に課題を入れるようにした。
- ③ 大きな課題の中に具体的なねらいがあることがわかった。
- ④ 課題を達成するためにねらいがあることがわかった。
- ⑤ 実習中は課題を意識しなかったが、見返してみると、関連している目があった。
- ⑥ 記録を振り返ることで課題とねらいの関連性に気付くことができた。
- ⑦ 担当保育者の援助があり、課題とねらいを意識することができた。
- ⑧ 実習前に課題をよく考えて立てた。
- ⑨ その他

表(2) 課題を意識しなかった理由

| 番号 | 課題を意識しなかった理由                         | 数  |
|----|--------------------------------------|----|
| ⑦  | 主活動に対するねらいを立てていたので課題に対するねらいではなかった    | 11 |
| ②  | 課題とねらいを別に意識していた                      | 8  |
| ⑨  | ねらいの立て方がわからなかった                      | 7  |
| ①  | 課題もねらいも頭から離れていた                      | 5  |
| ④  | 課題とねらいがずれていた                         | 5  |
| ⑥  | ねらいは意識していたが、課題は意識していなかった             | 5  |
| ⑤  | 課題は意識したが、ねらいは意識していなかった               | 3  |
| ⑧  | 園の指導計画に合わせてねらいを立てたので課題と関連したねらいではなかった | 3  |
| ⑩  | その他                                  | 3  |
| ③  | 課題とねらいが同じだった                         | 1  |
|    | 合計                                   | 51 |

表(2) から課題をあまり意識しなかった理由で多いものは、課題とねらいが別のものになっており、関連していないということである。また、ねらいの立て方がわからない、ねらいと課題を意識しないで実習を行っていた学生もいた。課題をふまえてねらいを立てるという実習の流れを十分理解しないまま、実習へ取り組んだことが推察される。その他の項目で、記録や指導案の作成に時間をとられ、課題やねらいが頭から離れていたという記述があったが、逆に課題やねらいを意識していれば、指導案に取り組みやすかったかもしれないと思われる。

### 3. 課題を意識してねらいを立てることができた例(段階4. 5. 6)

課題を意識してねらいを立てた実習生は、114名で全体の44%であり、やや意識した実習生は87名で34%、とても意識した実習生は22名で9%であった。この結果から見ると、課題を意識してねらいを立てることができた学生は全体の87%となり、前回の調査では、「抽出記録全体の3割強が実習に当たっての課題と実習生のねらいを関連させたとの自覚を持っていた」<sup>3)</sup>ことからすると、継続した事前事後指導によって、課題を意識することにつながるものが

明白であると言ってよいであろう。

段階4. 5. 6を選択した実習生の課題を意識した理由を表(3)にまとめてみる。

表(3) 課題を意識した理由

| 番号 | 課題を意識した理由                           | 段階4 | 段階5 | 段階6 |
|----|-------------------------------------|-----|-----|-----|
| ④  | 課題を達成するためにねらいがあることがわかった             | 52  | 48  | 14  |
| ⑥  | 記録を振り返ることで、課題とねらいの関連性に気付くことができた     | 48  | 50  | 12  |
| ①  | ねらいを毎日立てることによって、課題を意識することができた       | 46  | 45  | 12  |
| ②  | ねらいの中に課題を入れるようにした                   | 37  | 26  | 11  |
| ⑦  | 担当保育者の援助があり、課題とねらいを意識することができた       | 44  | 35  | 9   |
| ③  | 大きな課題の中に具体的なねらいがあることがわかった           | 28  | 33  | 8   |
| ⑧  | 実習前に課題をよく考えて立てた                     | 17  | 27  | 8   |
| ⑤  | 実習中は課題を意識しなかったが、見返してみると、関連している日があった | 41  | 29  | 3   |
| ⑨  | その他                                 | 3   | 3   | 1   |
|    | 合計                                  | 316 | 296 | 78  |

学生が選択した理由の合計は690となったが、段階4. 5. 6を選択した学生は223名であり、一人平均約3項目を選んでいることとなった。

選択が多かった理由④、⑥はともに課題とねらいの関連性に気付くことができたという項目である。これは、実習中または実習後に自分の実習を振り返ることにより、気付くことができるものである。それは自己評価につながり、保育者としての意識の基盤となるものと考えられる。以下にそれぞれの項目に関連した具体的な記述を抜粋する。

#### ④、③、⑤

毎日毎日ねらいを立てることによって、自分をはじめに立てていたねらいと似たようなことに注目して観察していることがわかった。

⑥ 記録を書くときにもう一度振り返り、次の日のねらいとした。

① ねらいを立てて毎日の目標を決めていた。

⑦ 園でねらいを考えてくれたので、それを頭に

入れながら実習した。

- ⑧ 課題は「環境構成をする」ことを主として書きましたが、実習をしていくうちに「環境構成をする」ためにはまず「環境構成を学ぶ」ことの方が大切だと感じました。
- ⑤ 毎日の記録を見返してみたら、そのようなことがあり、自分で実感することがあったため。
- ⑨ 課題を達成できるように、毎日意識して過ごしていた。

#### 4. 全体を振り返って

次に実習全体を振り返った記述を段階別にまとめてみる。

##### 段階3

- ・一週間ごとに反省を書いていたので、目標をもって意識して実習をすることができた。

段階3は、課題を意識してねらいを立てることを、あまり意識しなかったという学生である。その理由として、課題とねらいがずれていた、主活動に対するねらいを立てていたので課題に対するねらいではなかったという項目を選択している。それでも、目標をもって意識して実習をすることができたという振り返りを行っている。これは、課題とねらいは関連していなかったが、ねらいは意識することができた例である。今後課題を意識しながら、ねらいを立てることを実践していく過程として、位置付けられるのではないだろうか。

##### 段階4

- ・実習前に自分の課題を確認しておくことで、記録にそれに関連したねらいを立てて行動することができた。
- ・毎朝自分の立てた課題を達成しようと思いつき、毎日の実習に取り組んでいた。
- ・毎日ねらいを立て、どのようにしたらそのねらいを達成することができるのか考えながら実習をすることができた。ねらいを立てることで毎日があったという間に過ぎていき、すごく充実した実習だった。
- ・ねらいをあいまいに立てていたため、具体的に立てることを意識して立てるように指導をいただいた。それから子どもの様子をねらいを意識して観察し、関わるすることができた。
- ・ねらいの立て方がよくわかっておらず、最初の方

損をしていた。簡単で自分が見たいところをねらいにすべきなのに、難しいねらいを立ててしまい、記録を書く時に困ってしまった。

- ・子どもたちと関わっているときに課題を意識することが大変だったが、記録を書くたびにその都度思い出し、振り返り、次につなげようとする気持ちを持つことができた。
- ・振り返って見ると意識せずとも課題に沿った行動をし、また、ねらいを立てることができていた。

##### 段階5

- ・記録を通して保育者からご指導をいただき、少しずつ課題を意識することができた。
- ・実習を振り返ると課題を意識しながら実習を行うことができていたと感じた。
- ・課題は常に意識できるようなものにしたので、実習中忘れてしまっても、振り返るとできていたという感じになった。また課題とねらいがつながるのは実習終了後に気付いた。
- ・課題を忘れることもあったが、記録を書くことで意識することができた。

##### 段階6

- ・毎朝ねらいを書いて担任の先生に提出していたため、毎日明確なねらいを持ち意識して実習に取り組むことができた。
- ・記録を書きながら、毎日ねらいを立てるの意味がわかった。前半はねらいを立てるのが大変だったが、後半は、実習中に明日はこのねらいにしよう、と思いつくようになった。

ねらいを立てることで実習が充実したものになったという記述から、ねらいの重要性を理解することができよう。また保育者の援助があって意識を持つことができることも大切な視点である。記録を書くことも課題とねらいを意識することにより、自分の中でより意味のあるものになっていくと思われる。次により具体的な例から課題とねらいの関連についてまとめる。

##### 具体例A

課題 「表情豊かに保育を行う」

一日実習などで余裕がなくなると、ふと我に返ったとき「今、私こわい顔しているかも」と思うときがあった。しかし意識することはできた。

## 具体例B

### 課題1「保育園における1日の流れを知ること」

この課題を達成するために最初の3日間はひたすら流れを覚えるようにしました。時計を見て「あ、もうすぐ〇〇の時間かな」などと意識しながら過ごすようにしました。

### 課題2「子どもへの言葉がけに配慮すること」

この課題達成は難しかったです。最初はなかなかいい言葉がけができませんでした。それで、担任の先生をよく観察して、どんな言葉をどんな時にかけているのかを意識して見るようにしました。また、その時の先生と子どもの気持ちも考えるようにしました。そうすることで、だんだんといい言葉がけができるようになりました。

## 具体例C

### 課題1「保育者の子どもたちに対する関わりを学ぶ」

担任の先生をはじめ、色々な場面で子どもたちと関わる先生方の声かけや、けんかななどの対応の仕方をよく観察し、自分も実践の中で試行錯誤しながら、子どもたちと関わりました。関わり方がわからなかった際に、担任の先生に相談すると、丁寧に教えてくださり、子ども同士のトラブルの場面に立ち会った時に解決へと導くことができました。

## 具体例D

### 課題 「子どもの気持ちを理解し、受け止め、その後の援助の仕方を学ぶ」

1歳児の担当でまだ言葉でのコミュニケーションがとりにくい年齢だったので、子どもの気持ちを理解するというをより意識して取り組むことができた。

## 5. 考 察

学生の個々の事例から、ねらいの持つ意味が理解できつつあることが推察できた。どのように意識するかについては、記録の振り返り、保育者の援助が重要であることもわかった。また、「忘れていても振り返るとできていた」「意識せずとも行動できていた」という学生もいた。自ら意識していないことに気付くということは、振り返りの中で自己評価を行うことであり、またそのことは実習全体に見通しを持つとすることにつながり、事前事後指導を含めた実習の流れの重要性を認識することであるといえよう。

## 6. 学生Eの記録から

今回の調査用紙で段階6の課題とねらいの関連をととても意識したと回答した学生Eの課題とねらいを詳述してみることにする。保育所では、3・4・5歳児の異年齢クラスに配属された。

### 課題1「様々な乳幼児の遊びや活動に自ら進んで関わる」

### 課題2「遊びに関わる中で、子ども理解を深める」

| 月日   | 保育所実習のねらい   |
|------|---|
| 5/25 | 子どもと保育士の一日の生活の流れを知る   |
| 5/26 | 保育士の仕事内容を知る<br>(土曜日で園児がいない)   |
| 5/28 | 子どもに対する保育士の関わりを観察する   |
| 5/29 | 3.4.5歳児クラスの様子や、一日の生活を知る   |
| 5/30 | 子ども同士の関わりを観て、子どもについての理解を深める   |
| 5/31 | 子どもたちの遊びにおける関わりを知る  |
| 6/1  | 子どもの年齢別の発達の違いを知る  |
| 6/2  | 土曜保育の生活の流れを知る   |
| 6/4  | 子どもの年齢別の発達と援助の違いを知る   |
| 6/5  | 保育士の子どもに対しての言葉がけを観察し、意味を理解する  |
| 6/6  | 保育士の言葉がけの意図を考え、理解する   |
| 6/7  | 子どもの遊びに積極的に関わり、特徴を知る  |
| 6/8  | 言葉がけに対する子どもの反応を観る   |
| 6/9  | 子どもの遊びに関わり、理解する   |
| 6/11 | 子どもに積極的に関わり子ども理解を深める  |
| 6/12 | (指導案のねらい)<br>5歳児 自分のイメージに合わせて作品を作り、夏や海に興味を持つ<br>4歳児 友だちと一緒に作る楽しさを味わう<br>3歳児 船や海作りを楽しむ |
| 6/13 | 戸外遊びにおける子どもたちの遊びに積極的に関わる  |
| 6/14 | 保護者と子ども、保育士の関わりを観察する  |
| 6/15 | 必要な援助を考え、援助する   |
| 6/16 | 子どもに必要な援助や声かけを行う  |

学生Eの実習における課題は、自ら進んで遊びに関わる中で子ども理解を深めるというものである。それをふまえた毎日の保育のねらいを振り返ってみると、

保育士の関わりを観察する

↓

子ども同士の関わりを観察する

↓

保育士の子どもへの言葉がけの意図を理解する



子どもの遊びに積極的に関わり、子ども理解を深める

という一連の流れを読み取ることができる。子ども理解を深めるという課題を常に念頭に置きながら、3週間という期間の中で、日々のねらいを立案し、着実に課題に到達しようとする過程が理解できよう。

#### Ⅳ. 今後の課題

これまで課題とねらいの関連性について学生の意識から考察を進めてきた。改めてねらいについて小川は「ねらいはある時点での子どもの解釈にすぎず、幼児の実態に合わせて修正していくことが必要なのである」<sup>4)</sup>と述べている。子どもの実態を把握することからねらいが生まれ、遊びの援助へとつながっていくのである。すなわち、課題とねらいを意識することは、子どもの実態を知ることであり、子どもへの援助のあり方を学ぶことであり、子ども理解が重要であることは言うまでもない。そしてそれは実習においても、子どもと関わり、子ども理解をしようとする中でねらいが生まれてくることにつながると考えられる。課題とねらいを意識することが、より充実した実習をすることにつながっていくのである。

各実習には保育者養成の立場から達成してほしい課題があり、学生はそれぞれの力量や意欲によって「課題」として設定している。この課題を意識し続けることができるように援助することが必要である。今回は、実習の事前指導の時間に課題を記入することによって実習中も意識することができたのではないと思われる。また前回からの継続調査で、学生も課題への意識を持ちやすかったと考えられる。さらに実習中の保育者の関わりも重要である。「毎朝ねらいを書いて担任に提出していた」「記録の指導からねらいを意識した」等、学生が課題をふまえたねらいの立案ができるような援助のあり方の具体的な道筋が見え始めている。今後はこれらの具体

例を活かしながら、実習園と養成校の連携を目指していきたい。また、事後指導での振り返りが大きな役割を果たすことも明白となった。事後指導だけではなく、教職実践演習の授業における学びも、実習での学びをより深化させ得るものと考えられる。教職実践演習では、保育記録の書き方、保育の計画立案、振り返りを行い、さらに目標となる行事に向けて実践していくプロセスを経て実践力を磨いていくことを目標としている。実習と教職実践演習の授業内容との連携、また教員間の指導方法の連携も保育者を目指す学生の育ちを支える重要な点である。

「毎日ねらいを立て、どのようにしたらそのねらいを達成することができるのか考えながら実習をすることができた。ねらいを立てることで毎日があったという間に過ぎていき、すごく充実した実習だった。」という学生の記述から、ねらいを意識することによって充実した実習を展開することができるということが理解できる。そして、その実習での学びが学生の育ちにつながり、自らの保育観、子ども観を形成する基盤となるのではないだろうか。

今後は、課題とねらいの関連を基本にししながら、記録による振り返りだけではなく、話し合いや、体験発表等、学生が自らの実習を振り返る機会を増やしていきたい。さらに、学生にとってより充実した実習となるための事前事後指導のあり方について、引き続き検討を重ねていきたい。

#### 引用・参考文献

- 1) 関東信越厚生局健康福祉部指導養成課 「指定保育士養成施設 教科目の教授内容」より抜粋 2011. 9
- 2) 「保育者を目指す学生の育ちを願って -課題とねらいの関連性-」大岩みちの、岸本美紀、山田悠莉、鈴木方子 日本保育学会第65回大会発表要旨集 p742 2012. 5
- 3) 同上
- 4) 小川博久「遊び保育論」萌文書林 2010